

平成 30 年度研究プロジェクト研究概要報告

研究種別	■自主研究 8	公益目的事業 17
主査名	谷口綾子 筑波大学大学院システム情報工学研究科リスク工学専攻准教授	
研究テーマ	新しい道路交通システム・施策導入時の社会的受容性*	
研究の目的：		
目的 1 自動運転システムや超小型モビリティ等、新しい交通モード、空間デザイン概念の社会的受容に必要な条件・プロセス・現状の社会的受容レベルを質的・量的に検討すること		
目的 2 過去に新規導入された交通モードの社会的受容性について、その歴史的経緯を社会学、民俗学視点で整理すること		
研究の経過（4月～3月）：		
2018年6月に開催された土木計画学研究発表会(春大会)にて、「自動運転システムの社会的受容」セッションを主査がオーガナイズし、研究メンバーが成果発表を行った。		
9月に名古屋と東京で研究会を開催し、AVsの社会的受容性について、インタビュー調査やアンケート自由記述の質的・量的分析、Uber 歩行者死亡事故のマスコミ報道の影響分析、アンケート調査による賛否意識のバイアスの存在可能性、英国と日本の意識比較、交通安全の祈禱に着目した民俗学的研究計画、大阪梅田駅北の再開発事業と AVs 専用道の可能性、等の話題提供と活発な議論が交わされた。また、11月末にドイツにおける AVs 社会的受容性の WEB アンケート調査を実施し、日英独の比較分析を行っている。		
さらに、過去の新技術導入経緯の質的調査として、現在、「クルマ」と「子ども」をキーワードに1897年以降の新聞記事検索(朝日・読売)や文献収集を進め、2月に東京にて成果共有のための研究会を開催した。現在、日本のモータリゼーションが始まった1950年代の人と自動車の関係を検討するヒントにすることを目的に、NHK 番組アーカイブス学術利用トライアルに応募中である。		
研究の成果（自己評価含む）：		
研究メンバーそれぞれの研究成果を研究会の場で共有し、議論することで、自動運転システムに対する人々の賛否意識の規定因や、過去の新聞報道分析で当時の新交通モードであった自動車を人々がどのように受け入れてきたのかを把握する一助としての成果をえることができた。研究活動は、次年度以降も引き続き行う予定である。		
今後の課題：		
自動運転システムの社会的受容を計測するための標準的な指標を作成し、我が国で今後実施される実証実験の評価に用いるよう各方面に呼びかけたい。また、過去に新規導入された交通モードの社会的受容の経緯について、新聞や TV 番組以外のメディアとしてどのようなものがあり得るか、検討する必要がある。		